

宗祖の信心仏性義に関する一考察

―明恵の『選択集』批判を踏まえて―

石 山 恵 然

はじめに

本研究は、親鸞聖人（以下、宗祖。一一七三―一二六二）が『本典』に信心仏性義を開顕した背景について、法然聖人（一一三三―一二二二）の『選択集』に対する華嚴宗の明恵（一一七三―一二三二）による批判を踏まえて考察するものである。

明恵が『摧邪輪』・同『莊嚴記』を著して専修念仏を論難したことは広く知られている。その要点は、菩提心が仏道の根幹であり、かつ往生浄土の正因であるという菩提心正因説であるとされる。この明恵の論難に対し、宗祖が『本典』『信巻』の「菩提心釈」にて、横超の大菩提心を開顕し、法然浄土教の真实性を論証したと、多くの先行研究にて指摘されている¹⁾。

ところで、「信巻」にはこの横超の大菩提心が顕示されるとともに、如来回向の信心が仏性であるという信心仏性義も明かされている。仏性は、各宗で盛んに議論されるものであり、古来、真宗においても仏性論は種々に研究されてきたが、この他力の信心を仏性とする教義が成立した背景については、未だ十分に議論されていないと思わ

れる。

本研究は、この信心仏性義成立の背景の一端を明らかにすることを目的とするのであるが、明恵は菩提心正因説を展開する際に、菩提心と仏性や真如との関係性を踏まえて批判を行っていることが指摘されている⁹⁾。ただし、宗祖が他力回向の信心を仏性とする旨をどのように示し、応答したかについては、なお一考の余地があると思われる。そこで、明恵の専修念仏批判への応答という視点から、宗祖の信心仏性義を検討することとする。これにより、如来回向の眞実信心が仏性であることが開顕された背景の一端を明らかにすることができると思われる。

一、明恵の菩提心・仏性理解

まず、明恵が『選択集』を批判する際に、どのような菩提心・仏性理解に立っていたのかを確認する。『摧邪輪』では、『仏性論』に拠り以下のように述べられている。

夫菩提心者、不可求_レ外、即己心性故、未可_二必為_一難_レ起也。(中略)此果性_二応得_一等三因、『仏性』中即名_二「_二応得因_一」。以_二「菩提心」、名_二「加行因」_一。如_二『仏性論』第二云_一、「復次仏性体有_二三種_一三性所撰義」。応_レ知、三種者、所謂三因三種仏性。三因者、一_二「_二応得因_一」、二_二「_二加行因_一」、三_二「_二円満因_一」。応得因者、二空所現真如、由_二「此空_一」故、_二「_二応得_一」菩提心及加行等乃至道後法身_一故、称_二「_二応得_一」。加行因者、謂菩提心。由_二「此心_一」故、能得_二「_二三十七品十地_一」十波羅蜜助道之法乃至道後法身_一、是名_二「_二加行因_一」。円満因者、即是加行。由_二「_二加行_一」故、得_二「_二因円満及果円満_一」。因円満者、謂福慧行。果円満者、謂智斷恩徳。」(已上)(中略) 応得因性、法爾有_レ之。加行円満二因、待_二「_二因

円「顕發。其因縁非^レ一、触^レ類繁多。是故經中說^二發心因縁^一、出^下慈心悲心施心慳心等種種不同^上。是故有^二宿善一人、自然感動。見聞悉為^二道心因縁^一。猶如^二解宝之人研石見^レ宝。無福之人雖^レ聞^レ教、不^二發心^一。猶如^下盲者遇^二日光^一無^中所見^上。既說^二嗔恚慳貪等^一、猶為^二發心因縁^一。何況有^二弥陀教^一時、何不^下發^二菩提心^一修^中菩提行^上耶。

（『日本思想大系』一五、三四一頁、下—三四二頁、上。）

このように、『仏性論』の三因仏性説を依用して、本有の仏性（応得因）が仏縁に遇つて顕發したところを菩提心（加行因）とする。菩提心が發起する因縁は種々あり、「嗔恚・慳貪」等でさえ發心の縁になり得るのであるから、阿弥陀仏の教えに出遇つて菩提心を起こさないのは道理に合わないとしている。

また、

菩提心者自性空為^レ義。空法即無^レ有^二差別^一也。依^レ之龍樹大聖造^二『菩提心離相論』^一、演^二菩提心性無相義^一。即如^二彼『論』云^一、「菩提心者、離^二一切^一性。問曰、此中云何離一切性。答。謂蘊処界離^二諸取捨^一、法無我平等、自心本来不生。自性空故」等（云々）解曰、此約^二大乘^一說^二菩提心体^一。与^二法無我理^一相応心、指^レ此云^二菩提心^一。

（『日本思想大系』一五、三二一頁、上）

と、龍樹菩薩の『菩提心離相論』をもとに、菩提心を「与^二法無我理^一相応心」と定義し、先に見た『仏性論』にお

ける「二空所現真如」（応得因）を菩提心の本質とする理解が、大乘共通の理解であるとされている（「約二大乘」説「菩提心体」）。

そして、明恵は、右のように菩提心を定義した上で、法然聖人の「念仏の心」（おそらくは、『選択集』「三心章」の説示などを意識したものと思われる）を次のように批判する。

又委解_レ之、汝撥菩提心邪見者、三宝四諦皆撥_レ之也。何者、謂菩提心者、自性空為_レ性。如_二前菩提心決成_一之。然汝相_二違菩提心_一、立_二別念仏心_一。即是可_レ為_二性有心_一。然三宝四諦、皆畢竟真空為_レ性故、汝雖_レ不_二作意_一、不覺而撥_二去之_一也。若云_二性有_一者、即同_下數論外道計_中有性与_二諸法_一上。

（『日本思想大系』一五、三三五頁、上）

菩提心を廢し立てられた「念仏の心」（「汝撥菩提心邪見者」）は、自性空の義を具えない外道の所論に等しいものであり、菩提心と同じく自性空を根本とする三宝四諦すべてを否定していると難じている（「三宝四諦、皆畢竟真空為_レ性故、汝雖_レ不_二作意_一、不覺而撥_二去之_一也」）。法然が菩提心を廢捨し、打ち立てた「念仏の心」は「性有の心」であると批判するのである。

これが、明恵の菩提心・仏性理解の基本的立場であることは、從來指摘されてきた⁽³⁾通りであるが、本研究では、堅慧（生没年不詳）『法界無差別論』の受容に着目したい。

若非_二此義_一而泛言_レ之者、正助能所等義、随_レ事為_二不定_一。或有_下以_二菩提心_一為_中能助_下、如_三『法界無差別論』

菩提心名_二不退失因_一。能助_二一切功德_一令_レ至_二究竟_一故。或有_下以_二菩提心_一為_中所助_上、如下同『論』出_二菩提心因義_一云_上。「信為_二其種子_一、船若為_二其母_一、三昧為_二胎藏_一、大悲乳養人也」。香象大師釈云、「今此四縁令_二菩提心起_一故、名為_レ因。非_二菩提心与_レ仏為_レ因_一等」云々

（『日本思想大系』一五、三三二頁、下）

この一段では、菩提心に関する説相に種々あることが明かされ、『法界無差別論』における菩提心が起る因としての「信・般若・三昧・大悲」という四因（四縁）が受容されている。

この四因とは、先に引用されていた『仏性論』においても言及されるものである。

離_下發行大乘_一修_中習無障道_上人之外、所余闡提・外道・声聞・独覺等四人、有_二四種障_一故。不_レ見_二仏性_一。何者、四障。一、憎_二背大乘_一。是闡提障。為_レ對_二治此_一故、仏説_三菩薩修_二習信_一樂大乘之法_一。二、於_二諸法中_一、起_二我見執_一。是外道障。為_レ對_二治此_一故。仏説_三菩薩修_二習般若波羅蜜_一。三、於_二生死中_一。定_二執苦想、及厭怖心_一。是声聞障。為_レ對_二治此_一故。仏説_三菩薩修_二習破空三昧_一。空三昧者、從_二初地_一以上、能得_二此三昧_一。則破_二虛空等執_一。入觀之時、不_レ即_二有無_一。不_レ離_二有無_一。喻如_三八地真俗双觀_一、而異_二八地者_一。八地以上、無_二出入觀_一。初地、入時則同、出時則異。四、背_二衆生利益事_一。作_下捨_二衆生_一意_上。是独覺障。為_レ對_二治此_一故。仏説_レ修_二習菩薩大悲_一。菩薩大悲、利他為_レ事。明_下独覺人但自觀_一因縁_一、無_中度_レ他意_上故、無_二大悲_一。声聞亦爾。為_レ滅_二此四障_一故、以_二信樂等四種_一為_レ因。令_下諸菩薩修_二習此因_一、得_レ至_中無上法身_一、清淨波羅蜜_上。是名_二仏性清淨因_一。如是之人、得_レ名_二仏子_一。是故、仏子有_二於四義_一。一、因。二、縁。三、依止。四、

成就。初言^レ因者、有^レ二。一、仏性。二、信樂。此両法、仏性は無為。信樂約^二性得仏性^一、為^二了因^一。能顯^二了正因性^一故。信樂約^二加行^一、為^二生因^一。能生^二起衆行^一故。二縁者、謂般若波羅蜜。能生^二菩薩身^一。是無為功德家縁故。三依止者、破空定等。樂有之人、執^二斷無処有^一樂・淨等^一故。菩薩修^二破空三昧^一、能除^二彼執^一、由^二此定力^一。是故、菩薩法身堅固、則不^二羸弱^一。四成就者、菩薩大悲利^二益他^一事、無尽故。由^二真如不^レ尽^一。衆生無數故、利益事亦復無尽。是仏性為^二応得家因^一故。一因、如^二父身分^一。二縁、如^レ母。三依止、如^二胞胎^一。四成就、如^二乳母^一故。諸菩薩由^二此四義^一、名為^二仏子^一。

（『大正藏』三一、七九七頁、下―七九八頁、上）

右のように、『仏性論』では、四障を破り仏果に至る因としての四因（「以^二信樂等四種^一為^レ因^一」）が示されている。また、四因と同じ要素の名称を用いて、仏子に具わる四義として、「因・縁・依止・成就」の四つが説明されている。そのうち第一の「因」では、信樂（信）について明恵が『摧邪輪』に引用する三因仏性説と同様に⁽⁴⁾、無為の仏性（性得の仏性（応得因））と有為の願行（信樂（加行因））と衆行（円満因））が論じられているのである。これら一連の論説に関して、仏果に至る因としての四因が仏性清浄の因とされ、この四因を修習する人（「如是之人、得^レ名^二仏子^一」）が仏子と名づけられることから、右の一段に説かれる二つの「信樂」（四因中の「信樂」と、仏子に具わる四義のうちの「因」にて語られる「信樂」）は、同一概念であり、前者にも三因仏性説と同じ性質が認められると考えられるのである。すなわち、『仏性論』における四因（前者の「信樂」を含む四種の因）は、三因仏性説と同じく、明恵が理想とする仏性にもとづく菩提心を中心とした菩薩の実踐行の体系を意味すると理解されるのである。そして、この『仏性論』における大涅槃に至る因としての四因は、『法界無差別論』と同じく堅慧

造とされる『宝性論』にも示されるものである⁹⁾。

ここで、三論における四因が説示される際の相違点と、明恵による受容について整理しておきたい。『仏性論』と『宝性論』では、仏性（性得の仏性、三因仏性説における応得因に相当）を清浄ならしめる四つの行法として四因が説かれ、『法界無差別論』では、菩提心を發起せしめる因として示されるという違いがある。

ただし、これら三論における四因について、明恵は自らが菩提心・仏性の意義の根拠とする『仏性論』の三因仏性説と矛盾するものではないと理解していたと考えられる。まず、明恵が相承する華嚴宗の祖、法蔵（六四四―七一）の『法界無差別論疏』において、

今此四縁、令^レ菩提心起^レ故、名^レ因。非^レ菩提心与^レ仏為^レ因。下別釈^二四義^一。初釈^二種子^一。（中略）此上四義、一因、二縁、三摂、四養。『仏性論』・『宝性論』皆同。

（『大正藏』四四、六六頁、上―中）

と、三論の四因が重釈され、意趣は同じであると指摘されている。次に、『法界無差別論』当面においても、「（菩提心は）能益^レ世善法、聖法及諸仏所依・宝処・如（因か）、如^二地海種子^一」¹⁰⁾という偈頌があり、菩提心が仏性や如来蔵と同義であることがおのずから示されていると言われており¹¹⁾、菩提心の本質が仏性・真如であることに反しない。そして、明恵はこの『法界無差別論』の偈頌を『摧邪輪』にて以下のように受容し、

菩提心者、是菩薩所樂法也。上人厭^二惡之^一。知、是魔儼也。（中略）如下『法界無差別論』説^二菩提心因義^一頌

云^上。「能益^レ世善法聖法及諸仏。所依宝処因、如^二地海種子^一」。長行云、「如^二種子^一、一切仏樹出生相統之因故」。〔文〕凡如^レ此論藏、『華嚴』等諸經、此文遍滿、不^レ能^二始成立^一。凡生^二在仏家^一、以^二菩提心^一為^二羯羅藍種子^一。然撥^二去之^一。豈非^レ煎^二仏性種子^一乎。

（『日本思想大系』一五、三七九頁、下）

菩提心を廢する法然の教えは、仏性を破し、仏道修行の「始」（仏性の初発としての菩提心）が成立しないと批判しているからである。すでに引用した『仏性論』にて、「加行因者、謂菩提心。由^二此心^一故、能得^二三十七品十地十波羅蜜助道之法乃至道後法身^一」と示されていた通り、仏性を体とする菩提心が諸行を生み出すのであるから、「始」を欠くとされるのである。

以上のように、明恵においては、『仏性論』等を根拠に、本具の仏性に基づく自力の発心修行としての四因が依用されていたことが窺え、なかでも『摧邪輪』では菩提心の因としての四因（『法界無差別論』）が受容されていることが確認された。

二、横超の大菩提心

右に、明恵の菩提心正因説に立った専修念仏批判の一端を窺った。その批判論理は、法然聖人の明かす「念仏の心」の本質を問うものであった。また、『選択集』では明言されていないが、法然聖人には往生浄土を目指す願生心を浄土宗の菩提心とする理解があったことが、『三部經大意』⁽⁸⁾などに伝えられている。明恵は、この教説にも触

れていたであろうか、『莊嚴記』では以下のような問答を設けている。

問。違^二『離相論』説^一、可^レ然。違^二『仏性論』有為願行菩提心義^一、如何。設雖^三『選擇集』不^レ立^二菩提心別名^一、若有^二欣求淨土之心^一者、豈非^レ願乎。答。如^二前説^一。順^二第一義^一心、名^二願心^一。違^レ此者、即非^二正願^一也。夫言^二大願^一者、必目^二於真正義^一。謂外道之善願邪而非^レ正。人天之樂願似而非^レ真。其所得果、終必有^二盡極^一者、依^レ無^二真正義^一也。其真正願者、必相^二順^二二空理^一。

（『浄土宗全書』八、七七八頁）

ここでは、「浄土宗」側から、欣求浄土の願生心をもって明恵が依拠する「有為の願」に当てる応答が想定されている。それに対し、二空の理（『仏性論』所説の二空所顯の真如）にかなわなければ、邪因にすぎないと反駁している。したがって、法然聖人の門弟たちにおいては、『觀經』延いては『大經』に説かれる三心をもって、「浄土宗」の菩提心とすることを答えるのみでは、その「念仏の心」の本質の応答にはならなかったと考えられるのである。

そこで、宗祖においては選択本願念仏説では横超の大菩提心が往生成仏の正因であること、この他力の菩提心が仏性（真如一実の功德宝海たる名号）を本質とすること、その真実の菩提心がどのようにして衆生の上に回向成就せしめられるかを開顯するという課題があったことが想定されるのである。

すでに多くの先行研究にて、「信卷」の「菩提心釈」が明恵の論難に対する応答であると指摘されている。

然就「菩提心」有「二種」。一者堅、二者横。又就堅復有「二種」。一者堅超、二者堅出。堅超・堅出、明「樞実・頭蜜・大小之教」。歴劫迂回之菩提心、自力金剛心、菩薩大心也。亦就横復有「二種」。一者横超、二者横出。横出者、正雜・定散、他力中之自力菩提心也。横超者、斯乃願力回向之信樂、是曰「願作仏心」。願作仏心即是横大菩提心。是名「横超金剛心」也。横堅菩提心、其言一而其心雖異、入真為「正要」、真心為「根本」、邪雜為「錯」、疑情為「失也」。忻求淨利道俗、深了「知信不具足之金言」、永「離」聞不具足之邪心「也」。

〔聖典全書〕二、九一頁）

ここでは、堅横・出超の対目が設けられ、それらを組み合わせることにより、聖道自力の菩提心（堅出・堅超）と、浄土門内における真実（横超）・方便（横出）の菩提心が明らかにされている。そして、願力回向の信樂である横超の大菩提心が、法然聖人の選択本願念仏、さらには善導（六一三—六八一）流念仏における真意であると応答されていると考えられている。

また、「菩提心釈」に先立つて、「白道四五寸釈」以下、『選択集』で「善導所釈菩提心」⁽⁹⁾と述べられ、明恵が善導大師も菩提心を正因としてしていると主張する際に証文とする『観経疏』『帰三宝偈』⁽¹⁰⁾の文などが、

『観経義』云、^下「道俗時衆等、各發「無上心」、生死甚難厭、仏法復難忻。共發「金剛志」、横超「断四流」、正受「金剛心」、相「応一念」後、果得「涅槃」者」^上。〔抄要〕

又云、「真心徹到厭「苦娑婆」、忻「樂無為」、永歸「常樂」。但無為之境、不可「輕爾即階」、苦惱娑婆無「由」輒然得「離」。自「非」發「金剛之志」、永絶「生死之元」。若不「親從」慈尊、何能勉「斯長歎」。」

又云、「言^二金剛^一者、即是無漏之体也。」〔已上〕

信知、至心・信樂・欲生、其言雖^レ異、其意惟一。何以故。三心已疑蓋無^レ雜、故真實一心。是名^二金剛真心^一。金剛真心、是名^二真實信心^一。

〔聖典全書〕二、九〇頁）

と、三心即一の眞實信心（金剛の真心）であることが開顯されていると言われている。

それでは、この横超の大菩提心の本質が真如にかなうものであることが、どのようにに応答されたのであろうか。本論文では、『選択集』では明示されていなかった、この横超の大菩提心の本質が仏性であること、衆生が信心獲得に至る構造について、「信巻」「信樂釈」に引用される『涅槃經』「大信心仏性」の引文を考察することとする。

三、信心仏性義の検討

まず、先に触れた『法界無差別論』や『仏性論』などの四因に関する淨影寺慧遠（五二三―五九二）の『大乘義章』における解釈を参照する。

言^二自（因か）性^一者、性從^レ緣起。集^二成行徳^一。行徳未^レ円、説^レ之為^レ因。因行雖^レ衆、且論^二四種^一。一者、信心。二、是般若。三、是三昧。四、是大悲。故彼『論』言、「信心与般若・三昧・大悲等、以治^二四障^一、得

「四果」故。且説「四耳」。(中略)就「因辨」性、故名「因性」。是以『經』言、「仏性者名「大信心」。名「般若波羅蜜」。名「首楞嚴定」。名「大慈悲」。斯文顯矣。

(『大正藏』四四、四七四頁、下—四七五頁、上)

ここでは、『宝性論』に示される四因の出拠として、『涅槃經』「大信心仏性」の文が指摘されている。つまり、宗祖が引用する「大信心仏性」等の引文は四因との関連性を有すると言えるのである。

『宝性論』と『大乘義章』は、『法界無差別論』・『仏性論』と同じく、明恵に受容されていたことが確認される。

⁽¹²⁾ 宗祖もこれらの論釈を在叡時代などから披見していたと思われる。右の想定のもと、明恵の論難との対応性を整理すると、明恵は本具の仏性に基づく自力の発心修行の枠組みで、菩提心を發起せしめる因縁としての四因(『法界無差別論』)を論難に用いていた。これに対して、宗祖は四因に関連する『涅槃經』の文を浄土真実の救済法の枠組みで依用し、横超の大菩提心の本質とその獲得の構造を開顕したと考えられる⁽¹³⁾。以下、引用文の内容に沿って検討していく。

『涅槃經』言、「善男子、大慈大悲名為「仏性」。何以故。大慈大悲常隨「菩薩」、如「影隨」形。一切衆生畢定當「得」大慈大悲」、是故説言「一切衆生悉有仏性」。大慈大悲者名為「仏性」、仏性者名為「如来」。大喜大捨名為「仏性」。何以故。菩薩摩訶薩若不「能」二十五有」、則不「能」得「阿耨多羅三藐三菩提」。以「諸衆生畢當」得故、是故説言「一切衆生悉有仏性」。大喜大捨者即是仏性、仏性者即是如来。仏性者名「大信心」。何以故。以「信心」故、以下「菩薩摩訶薩則能具」足檀波羅蜜乃至般若波羅蜜」、一切衆生畢定當「得」大信心」故、是故説

言「一切衆生悉有仏性」。大信心者即是仏性、仏性者即是如来。仏性者名「一地」。何以故。以「一地」因縁故、菩薩則於「一切衆生」得「平等心」。一切衆生畢定當「得」一地故、是故説言「一切衆生悉有仏性」。一地者即是仏性、仏性者即是如来。」「(已上)

〔聖典全書〕二、八四―八五頁〕

まず、「善男子、大慈大悲名為「仏性」。何以故。(中略)大喜大捨名為「仏性」。何以故。菩薩摩訶薩若不「能」二十五有、則不「能」得「阿耨多羅三藐三菩提」。(中略)大喜大捨者即是仏性、仏性者即是如来」の箇所は、四因のうちの「大悲」に相当すると考えられる。このうち、諸本では「不「能」捨二十五有」という經説であるが、「信卷」の引文では「不「能」二十五有」となっている。この差異に関して、興隆師(一七五九―一八四二)が「すべての衆生を教化・濟度する」ということを意味するとの指摘をしている⁽¹⁴⁾。

師の指摘を参照して、本願の三心それぞれの「法義釈」を確認すると、「至心釈」では「如来悲憫一切苦惱衆生海」⁽¹⁵⁾、「信樂釈」では「如来悲憐苦惱群生海」⁽¹⁶⁾、「欲生釈」では「如来矜哀一切苦惱群生海」⁽¹⁷⁾と、述べられている。なかでも、「至心釈」においては、善導大師の『觀經疏』「至誠心釈」における「不簡内外明闇」という説示が、『涅槃經』をもつて自釈され、「一乘大智願海」⁽¹⁸⁾と、誓願「一仏乗の法門であることが明らかにされている。明恵においては、大乘の菩薩が成就すべき大悲(自力の仏道)を意味していたが、宗祖はこの「信樂釈」において、二十五有をもつて迷いの衆生を挙げ、そのすべてを漏らさず救いとる弥陀の大悲として受容し、万機普益の救済法であることを顯したと考えられるのである⁽¹⁹⁾。

次に、「仏性者名「大信心」。何以故。(中略)大信心者即是仏性、仏性者即是如来。」の一節には、「菩薩摩訶薩

則能具^二足檀波羅蜜乃至般若波羅蜜^一と、菩薩（法藏菩薩）による六波羅蜜の修習が説かれている。この六波羅蜜には、禪定・般若の二つの波羅蜜が含まれていることは贅言を俟たないが、この説示は四因のうちの「般若・三昧」に相当すると考えられる⁽²⁰⁾。これは、三心それぞれにおいて、法藏菩薩の發願修行への言及がなされ、特に「至心積」では「如來以^二清淨真心^一、成就^二圓融無礙不可思議不可稱不可說至德^一」⁽²¹⁾と明かされ、『大經』から法藏修行の一段が引用される⁽²²⁾のに対応すると窺われるからである。すなわち、法藏菩薩の不可思議兆歳永劫の修行によって、真如一実の功德宝海たる真實行が仕上げられたことが念頭に置かれていと考えられるのである。

そして、四因のうちの「信」に相当するのが、右の一節を含む「仏性者名^二大信心^一。何以故。（中略）大信心者即是仏性、仏性者即是如來。」という經文である。すでに「至心積」との連関性を指摘したが、さらに『涅槃經』から「真実」について「行卷」「一乗海積」引文と一連の文をもって、真実信心の体である名号法の遍滿が開示されている⁽²³⁾。加えて、「信樂積」で、「次言^二信樂^一者、則是如來滿足大悲圓融無礙信心海。是故疑蓋無^レ有^二間雜^一。故名^二信樂^一。即以^二利他回向之至心^一為^二信樂體^一也。然從^二無始^一已來一切群生海、流^二轉無明海^一、沈^二迷諸有輪^一、繫^二縛衆苦輪^一、無^二清淨信樂^一、法爾無^二真実信樂^一」⁽²⁴⁾と、その至心が信樂の体となること、「真実の」という修飾語が付され開顯されている。このことから、「至心積」と連関して、「大信心仏性」の引文の前に引用される本願成就文の「聞其名号、信心歡喜」という經文に合わせて、他力回向の真実信心が衆生の上に回向成就される構造を説く教説として、「涅槃經」「大信心仏性」の一連の經説が受容されていると考えられるのである。

この真実信心が、「菩提心積」で明かされる横超の大菩提心であることは贅言を俟たない。すなわち、法然淨土教では本有仏性に基づく自力の発心修行ではなく、十方世界に遍滿する弥陀の名号を体とする如來回向の菩提心が往生成仏の真因であることが開顯されたのである。

おわりに

右のように、「信樂釈」における『涅槃經』「大信心仏性」の文が引用された背景として、明恵が菩提心正因説をもつて法然浄土教を批判し、その際、『仏性論』などから本具の仏性に基づく自力の発心修行としての四因（四縁）が受容されていたこと、特に『法界無差別論』の菩提心の因としての四因が依用されていたことが想定される。

宗祖は、その四因に関連する『涅槃經』の説示を、『大経』に説かれる仏願の生起本末を顕す教説として取り込んだと考えられる。これにより、横超の大菩提心の本質が十方世界に遍満する真如一実の功德宝海たる名号であることが開顯されたと考えられるのである。すなわち、法然浄土教で明かされた「念仏の心」は仏性を本質とする横超の大菩提心であり、弥陀の智慧と慈悲が円満した大涅槃の真因であることが、如来回向の枠組みで明らかにされたのである。

最後に、今後の課題について一言しておきたい。宗祖は、通仏教で自力の発心修行として語られる四因を法蔵菩薩の発願修行、名号法の回向成就に転用しているのと同じと見ることが出来る。この転換の意趣としては、天親菩薩『浄土論』に示された行者がなすべき五念門行を法蔵所修へと転換したことに軌を一にするものと言えよう。

ここで問題となるのが、この転換の根拠である。宗祖によって顕された浄土真宗の法義は、「絶対他力の救い」と呼ばれ、衆生の側で具えるべき業因・仏因は何一つないとされる。だからこそ、五念門の行は法蔵の所修であるというのが、真宗学の研鑽における共通認識となっている。これは、宗祖が『浄土論』・『論註』から五念門の説示を引用する際に付した訓点をもとに指摘されてきたのであり、否定すべくもない真宗教義の特色である。

ただし、宗祖が右のように法然浄土教への論難に応答するには、浄土異流も含む諸宗徒が首肯せざるを得ない論拠が必要なのである。すなわち、従来指摘されてきた五念門や、本論文で着目した四因を法蔵所修へと転換するに際し、宗祖はいかなる根拠をもってその転換を行ったのか、という問題を論じる必要がある。この点については、別の機会に論じたい。⁽²⁵⁾

(註)

- (1) 浅井成海「一九九五」、石田充之「一九六六」、井上善幸「二〇〇九」、岡村謙英「二〇二四」、梯實圓「一九九八」、殿内恒「二〇〇八」、普賢晃寿「一九七二」、など。
- (2) 浅井成海「前掲論文」、紅樸英顕「一九六九」、井上善幸「二〇〇七」、岡村謙英「前掲論文」、前川健一「二〇一二」、など。
(3) 註2、参照のこと。
- (4) 『仏性論』「三因品」「果円満者、謂智断恩徳。此三因、前一則以「無為如理」為「體」。後二則以「有為願行」為「體」(『大正蔵』三一、七九四頁、上) この箇所は『莊嚴記』にて言及される。(『浄土宗全書』八、七七八頁、上)
- (5) 『大正蔵』三一、八二九頁、中
なお、『仏性論』では「信樂」(信)と「仏性」が「因」の項目下で同列に扱われており、『宝性論』とは説相を異にする。(高崎直道・柏木弘雄「二〇〇五」、一五七頁を参照した。)
- (6) 『大正蔵』三一、八九二頁、中
- (7) 高崎直道「一九九九」、四一—四二頁を参照した。
- (8) 『聖典全書』三、一一〇六頁、下

この『三部經大意』は、法然浄土教を伝える資料として真偽が議論されてきたものである。本論文では、浄土宗鎮西派、良忠（一一九一—一二八七）の門弟とされる良聖（生没年不詳）による建長六（一二五四）年の書写本が伝わっていることから、宗祖晩年には法然聖人の法語として流布していたものとして扱う。（宗祖周辺では、正嘉二（一二五八）年に書写されたと伝わる「真仏本」（高田派専修寺藏）が存在する。）

(9) 註1、2、参照のこと。

(10) 『聖典全書』一、一三二〇頁

(11) 『摧邪論』「仏法諸行皆応_レ讓_レ功於菩提心」。以_二菩提心_一是体、称名等是業_一故。是故若就_下菩提心与_二称名_一二行_上、論_レ之時、以_二菩提心_一為_二正業_一事、可_二理在絶言_一。是以『觀經疏』第一初云、「道俗時衆等各發_二無上心_一」。（此即菩提心也。乃至）願以_二此功德_一、平等施_二一切_一、同發_二菩提心_一、往_二生安樂國_一」（中略）此中既云_二「各發無上心_一」、不_レ云_二「各称弥陀仏_一」、云_二「同發菩提心_一」、不_レ云_二「同称弥陀名_一」、云_二「悉發菩提心_一」、不_レ云_二「悉称弥陀名_一」。当_レ知、菩提心是浄土正因故、惣標処唯出_二正因_一也。」（『日本思想大系』一五、三二七頁、上）

(12) 『宝性論』、『大乘義章』ともに、『莊嚴記』に引用が見られる。（それぞれ、『浄土宗全書』八、七八四頁、上と七七五頁、下—七七六頁、上）

(13) 明恵においては、基本的に『無上依經』が出拠として認識されていたと考えられる。（成立史的に言えば、『宝性論』↓『無上依經』の順に成立したとされている（高崎「一九九九」、三四—三五頁を参照した。）が、当時の仏教界においては以下のように、經典が先とされていたと考えられる。）

法藏『華嚴五教章』

八、寄_二四障_一以顯_二四位_一。此有_二二義_一。一、約_二正使_一寄_二顯地前四位・四行・四因・四報_一。何者為_レ四。一、謂以_二闡提不信障使_一滅已、翻_下顯十信之位成_レ信_上樂大乘行_一為_二淨徳因及鐵輪王報_上。一一、以_二外道執我障_一、寄以_二翻_下顯十解位成_レ般若行_上、為_二我徳因銅輪王報_上。三、声聞畏_レ苦障。寄_下顯十行位成_レ破虛空定器_上、三昧行_一為_二樂徳因銀輪王報_上。四、独

宗祖の信心仏性義に関する一考察

覺捨_二大悲障_一。寄_下顯十回向位成_二大悲行_一、為_中常德因金輪王報_上。又翻_二前四障_一、所_レ得四行即為_二仏子四義_一。翻_二初障_一、成_下信_二樂大乘_一種子_上為_レ因。即如_レ父也。二、般若為_レ緣。即如_レ母也。三、顯_下破虛空定離_二小乘執_一令_中法身堅固_上。如_レ胎也。四、大悲益_レ生。如_二乳母_一。具_二此四緣_一故。得_下從_二地前生_中在初地已中諸仏家_上故、名_二仏子_一也。又此四種和合、如_三車輪能運、能轉至_二解脫處_一。如_三聖王輪備有_二四事_一。謂轂・輞・輻・軸、如_二其次第一四義、応_レ知。第二、以_二四障習_一寄_二顯地上四位・四定・四徳・四報_一。一、初・二・三地滅_二闡提不信習_一。即顯_二此一位相同_二世間_一。又得_二大乘光明三昧_一、成_二於淨徳_一。除_二因縁生死、變易報_一。二、四・五・六地滅_二外道我執習_一。顯_二此一位相同_二二乘_一。得_二集福徳王三昧_一、成_二於我徳_一。除_二方便生死_一。三、七・八・九地滅_二声聞畏苦習_一。顯_二此一位相同_二大乘_一。得_二賢護三昧_一、成_二於樂徳_一。除_二有々生死_一。四、十地至_二仏地_一已還。滅_下獨覺捨_二大悲_一習_上。顯_二此一位因円果滿_一。得_二首楞嚴三昧_一、成_二於常德_一。無_レ有_二生死_一。四徳円故。生死永尽故。云_二無有_一也。此上義、広如_二『無上依経』・『本業経』・『仏性論』・『宝性論』・『梁撰論』等説_一。

〔『大正藏』四五、四九四頁、下—四九五頁、上〕

澄観（七三七—八三八）『演義鈔』

下『疏』明_二於四種生死_一。可_レ檢_二於此『論』_一。下文中、又広説_二常樂我淨之相_一。亦可_レ知_レ之。所_レ歸_下。言_二『宝性』・『仏性』二論_一者、大意同_二『無上依経』_一。『宝性論』当_二第四_一。『仏性論』当_二第二_一。此卷亦広論_二四種生死_一。

〔『大正藏』三六、五七頁、下〕

凝然（一一四〇—一一二二）『五教章通路記』

章八、寄_二四障_一以顯_二四位等_一者、此四障・四位・四行等相、一経之中、未_二必皆説_一。数部経論、合成為_レ言。『無上依経』説_二闡提等四障、信樂等四行等_一。『仏性論』中、亦説_二常樂我淨四徳波羅蜜因果_一。『仁王経』説_二金銀等四転王報_一。彼此

經論和合、織^二成地前四位^一。『仏性論』中、説^二仏子四義^一。文義不^レ難。不^二具科釈^一。

〔『大正藏』七二、五九四頁、中〕

このように、明恵が相承する華嚴宗の師釈や、明恵以後においても『無上依経』が出拠の第一候補とされていたことが窺える。法蔵『華嚴五教章』にて、「広如^二『無上依経』・『本業経』・『仏性論』・『宝性論』・『梁摂論』等説^一」と、「経↓論」の順で示され、澄観『演義鈔』では、「言^二『宝性』・『仏性』二論^一者、大意同^二『無上依経』^一。『宝性論』当^二第四^一。『仏性論』当^二第二^一」と、言われているからである。また、四因に關して『涅槃経』への言及はない。したがって、明恵も四因に對して、まずは『無上依経』を連想していたと考えられる。ただし、法蔵『華嚴五教章』に「広如^二『無上依経』↓等説^一」と述べられるように、『大乘義章』における『涅槃経』に拠る解釈を、右のように受容されていた経論に連なるものとして理解されていたと見ることに大過はないと考える。

宗祖においては、通仏教で語られる大乘菩薩がなすべき四因（本具の仏性に基づく発心修行（すべて自力）の枠組みに、本願他力の救済法を落とし込むことが目的ではない。本願念仏という通仏教の枠組みに収まらない仏道体系の上で、仏性や真如を語るのである。そのため、『無上依経』を用いないと応答にならないわけではなく、阿弥陀仏の他力本願による救済法を顯す上で、菩提心（他力の信心）の因としての四因の要素をどのように依用するかが問題であったと考えられる。

- (14) 興隆師『本典徴決』（『真宗全書』二三、三三頁、下）「くに能ふ（あたはず）」には、「程度、状態などによく合う。適合する。相当する」（『日本国語大辞典』一、三三七頁、A）という意味がある。深見慧隆氏「二〇二三」によれば、『日本古写経』を含む諸本において、「不能捨二十五有」となっているという。

この文字の異同が、宗祖の意図的なものであると断定することはできないが、「欲生釈」では『論註』が『浄土論』として、『浄土論』曰、「云何回向。不^レ捨^二一切苦惱衆生^一、心常作願、回向為^レ首得^三成就大悲心^一故」（『聖典全書』二、八八頁）と引用されている。三心ともに弥陀成仏の因果に言及される流れのなかで、「迷いの存在を捨てない」という『浄土論』

宗祖の信心仏性義に関する一考察

・『論註』に示される教理が、「信樂釈」の『涅槃經』引文と相通ずるかたちとなっていると見ることができよう。

(15) 『聖典全書』二、八〇頁

(16) 『聖典全書』二、八三頁

(17) 『聖典全書』二、八六頁

(18) 『聖典全書』二、八二—八三頁

(19) 三明智彰「一九九五」を参照した。

(20) 禪定と三昧について、6頁に引用した『仏性論』でも「菩薩修破空三昧、能除彼執、由此（禪）定力」（括弧内、筆者）とある。また、『宝性論』では、

初依_レ体・因_レ故、説_二一偈_一。自性常不_レ染、如_二宝・空・淨水_一。信法及般若、三昧大悲等。此初半偈、示_二現何義_一。偈言、自在力不_レ変、思実体柔軟。宝・空・水功德、相似相对法。此偈明_二何義_一。向説_二三種義_一。彼三種義、次第依_二於自相同相_一。如来法身三種清淨功德、如_二如意宝珠・虚空・淨水_一。相似相对法、应_レ知。此明_二何義_一。思者、依_二如来法身_一。所思・所修皆悉成就故。後半偈者、示_二現何義_一。偈言、有_二四種障礙_一。謗法及著我、怖_二畏世間苦_一、捨_二離諸衆生_一。此偈明_二何義_一。偈言、闡提及外道、声聞及自覺。信等四種法、清淨因、应_レ知。（中略）此是諸仏随順法子於_二仏家_一生。是故偈言、大乘信為_レ子、般若以為_レ母、禪胎、大悲乳。諸仏如_二実子_一。偈言「信等四種法、清淨因、应_レ知」一故。

（『大正藏』三一、八二八頁、中—八二九頁、中）

と説かれる通り、「三昧」と「禪（定）」が同義で用いられていると言える。（「信法及般若、三昧大悲等」と、「大乘信為_レ子、般若以為_レ母、禪胎、大悲乳」が対応するため。）これらのことから、四因のうちの「三昧」と、『涅槃經』引文に含意される「禪定（波羅蜜）」が対応するとした。

(21) 『聖典全書』二、八〇頁

- (22) 『聖典全書』二、八一頁
 (23) 『聖典全書』二、八二頁
 (24) 『聖典全書』二、八三頁
 (25) この検討課題は、天岸浄圓氏の指摘から着想を得たものである。感謝申上げる。

参考文献

(資料)

鎌田茂雄・田中久夫編『日本思想大系』一五、岩波書店、一九七一年

高崎直道校註『新国訳大藏經』(論典部) 一九―一、大蔵出版、一九九九年

高崎直道・柏木弘雄校註『新国訳大藏經』(論典部) 一九―二、大蔵出版、二〇〇五年

(書籍)

石田充之『鎌倉浄土教成立の基礎研究』、百華苑、一九六六年

普賢晃寿『日本浄土教思想史研究』、永田文昌堂、一九七二年

前川健一『明恵の思想史的研究―思想構造と諸実践の展開―』、法蔵館、二〇一二年

(論文)

浅井成海「法然門下の菩提心観(三)―親鸞の菩提心観を中心として―」『真宗学』九一・九二、一九九五年

井上善幸「親鸞の行信一念理解について(二)―特に明恵『摧邪輪』の所説との関連をめぐって―」『真宗学』一一五、二〇〇七年

井上善幸「親鸞の行信一念理解について(二)―特に明恵『摧邪輪』の所説との関連をめぐって―」『真宗学』一一九・一二一

宗祖の信心仏性義に関する一考察

〇、二〇〇九年

岡村謙英『『信卷』菩提心釈と信一念釈の意義―明恵上人への弁明として―』『龍谷教学』五七、二〇二四年

梯實圓『『摧邪輪』と『教行信証』』『山口真宗教学』一〇、一九九八年

紅模英顕「真宗仏性論の一考察」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』八、一九六九年

殿内恒『『教行証文類』にみる対外的姿勢―仏道としての枠組―』『真宗学』一一六、二〇〇八年

深見慧隆「親鸞における『涅槃経』諸本の受容形態―刊本大藏経と日本古写経との比較検討を通して―』『龍谷大学大学院文学研究科紀要』四五、二〇二三年

三明智彰「信楽と仏性―『教行信証』信楽釈における『涅槃経』の文の意義―』『親鸞教学』六六、一九九五年